東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

バンコク日本人学校小学3年部における社会科指導と実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村岡,智 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173673

バンコク日本人学校小学３年部における社会科指導と実践

前泰日協会学校バンコク校（バンコク日本人学校）教諭
愛知県江南市立布袋小学校教諭　　村岡　智

キーワード：バンコク、社会科、わくわく、楽しい

１．はじめに

バンコク日本人学校に勤務し、3 年間小学 3 年部にお世話になった。1 年目は担任、2 年目、3 年目は主任の役職を担った。3 年目は 2 回目の主任とあって変化も求めたく、3 学級で社会科の授業を担当させてもらった。快く引き受けてくれた学級担任に心から感謝し、3 学級での実践を紹介したい。

２．実践

(1) 社会科の授業を行うにあたって

子どもたちは 3 年生になって初めての社会科の授業をとても楽しみにしていた。アンケートを取ってみても３学級とも「楽しみにしている」という子どもがほぼ 100%と、嬉しいような、プレッシャーのような、とにかく 1 年経って子どもたちが社会科を嫌いにならないように、楽しく授業を行っていきたいと感じた。

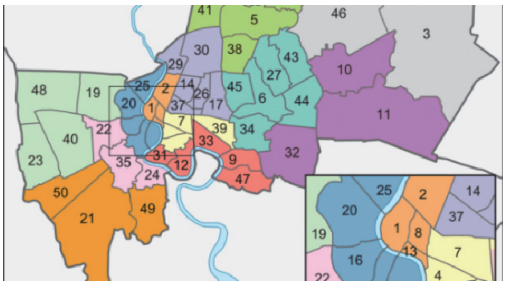
(2) 学校のまわり

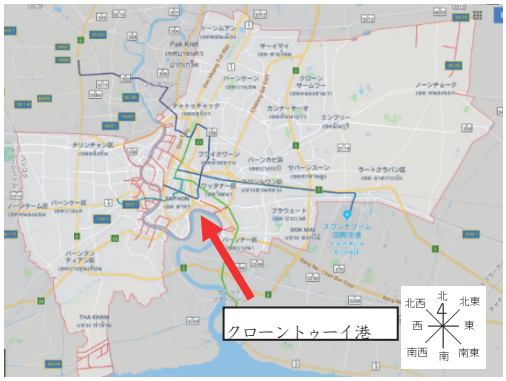
3 年生の最初の社会科といえば、「学校のまわり」である。しかしバンコク日本人学校では、時期（天候）、交通、治安といった様々な観点から学校の周りを歩くことは禁止されている。子どもたちは、我々教員が学校の周りを歩いて撮った映像を見ながら学校の周りに何があるのかを学習する。方位の学習ではみんなで応援団になりきって、「み～ぎ～、ひだり～、うしろ～、ま～え～」からの「とう・ざい・なん・ぼく、東西南北」と身体を使って方位を覚えた。もちろん、テストでは心の中で行うように伝えた。絵地図の作成も、苦手な子どももいるので、一緒に描いたり、途中で映像を止めたり、複数回観たりと、実際に外には出られないというマイナス要素を、映像のプラス要素でかなり補えたと思う。おかげで絵地図の作成は北・南・西の 3 つのコースがあったが、みんな興味をもって楽しく取り組むことができた。この後、地図記号を使って簡単に、早く、見やすくなるような地図を作成したが、絵地図が得意な子どもほど、地図記号を使って簡単にするというのが苦手であったり、反対に絵地図があまり得意でない子どもが地図記号になると力を発揮したりと、改めて考えると納得いく結果に驚きを隠せなかった。

(3) 屋上見学

6 月は屋上見学に行った。バンコク日本人学校の屋上は 3 年生のこの屋上見学でしか行くことができない貴重な経験である。教員も自分の学級の時間位しか行くことができないが、私は 2 年前に 1 回、昨年は主任として全学級の案内と説明で 12 回、今年も 12 回の案内と説明で、準備も合わせると 3 年間で 30 回程屋上に上がることができた。数多いバンコク日本人学校の教員の中で、間違いなく私が 1 番屋上に行くことができた。屋上から見える建物や道路、その方角にある目印となるものも、3 年目になると割と詳しく説明できるようになった。先生方に説明しても「へ～」と言ってもらえる。バンコク日本人学校で「私にしかできないもの」の数少ない 1 つであった。

(4)副読本「みんなのまちタイバンコク」の授業





社会科「市の様子」で仙台市を学習した後に、副読本「みんなのまちタイバンコク」を使ってバンコク都の様子を学習した。その中で、クローントゥーイ港について学習した。資料でクローントゥーイ港の場所が分かるだろうか。そう、クローントゥーイ港は海沿いではなく、川を入って来た所にある珍しい港である。仙台港について学習したので、導入ではまずクローントゥーイ港の場所を予想した。もちろん海沿いを予想する子が大半である。場所を明らかにした後、「なぜクローントゥーイ港はこんな場所にあるのだろう」というめあてで授業を開始した。子どもたちの方から分かったようにめあても出てくれた。最初は「便利だから」、「バンコクに近いから」という意見が出ましたが、深い理由は当然だが、出てこなかった。社会科が好きだと何かわくわくしてくる瞬間である。子どもたちにもいろいろヒント（情報）を与えていき、謎を解決していった。まずは川について、バンコク都を北から南に流れる大河はバンコク、タイの水源のチャオプラヤ川である。タイの人々の生活にはこのチャオプラヤ川なくしてはあり得ない。このチャオプラヤ川と仙台市でも学習した名取川を写真で比べた。とにかくチャオプラヤ川は「大きい、広い」。つまり、船が「入って来られる」ということである。さらに、交通について、バンコク都を見てもらうと、資料の 21 番の区しか海とは接していない。バンコク都の交通網と南部の県との交通網を比べると、南部は広い道がそれほどなく、高速道路もあまり通っていないことが分かった。これらのヒント（情報）を小出しにしていき、子どもたちはどんどんノートに詳しく理由を書き込んでいった。結論は、「チャオプラヤ川は広く、船が中まで入って来られる。またバンコク都に近い方が高速道路や鉄道が発達していて、船からすぐに物を運べる。さらに、外国に物をも運ぶ時もバンコク都から運ぶ方が同じように便利である」ということである。子どもたちもかなり文章で理由が書けるようになってきており、またヒント（情報）を出した時のあの「あっ、分かった！」の顔が何とも言えない。分かったことを書きたくて仕方がないのであるが、まだまだうまくまとめるまでには達していない。しかし、とにかく理由をたくさん書くことができるので、自分自身「分かってきた」という感覚を実感できているのではないだろうか。今後も子どもたちの「あっ！」を引き出せる授業を構築していきたいと思う。

この授業構想は、学芸大出身で学校採用の１年目の先生によって作られた。本当にすばらしい仲間と授業を構築できることに幸せを感じた。

(5)店ではたらく人

2 学期の社会科は「店ではたらく人」から始まる。3 年生も学校からバスで 30 分程の場所にあるマックスバリュに校外学習に行かせてもらう。しかし、授業計画を立てるのが難しく感じた。というのもバンコク日本人学校の児童の居住区域はかなり広く、買い物に行く場所は様々である。スーパーマーケットも我々が住んでいる居住区に 5 店舗程、近隣の駅にはショッピングモール内にあるスーパーマーケットもある。ショッピングモールは日本の感覚とは少し違い、マンションのシャトルバスが無料で行ってくれるので家の近くのスーパーマーケットよりも便利というご家庭もたくさんある。また、基本スーパーマーケットは 24 時間営業である。コンビニもたくさんあるが、コンビニのメリットはスーパーマーケットより安いものがある、マンションの下（1 階）や隣にある、狭いから早く買える、といった便利さである。タイではセブンイレブンの進出がとても激しい。ファミリーマートもローソンもあるが、割合的には 8：1.5：0.5 くらいの気がする。もしかするとセブンイレブンはもっとある

かも知れない。加えて、安さで言えば市場（タラート）がある。というような状況でスーパーマーケットに行かない家庭もある程、スーパーマーケットは１番便利というわけではないように感じた。しかし、ご家庭にも買い物調べをしていただき、何とかスーパーマーケットを１番利用しているという確証を得て、マックスバリュの校外学習「スーパーマーケットではたらく人」について学習を進めた。しおりにある各コーナーで聞きたいことを班毎に決め、担当も決めた。帰って来た時には、学級で聞きたかったひみつや工夫が全て解決する予定である。

⑹研究授業

社会科で研究授業を行った。バンコク日本人学校の本年度の研究では「対話」に重きを置いて研究を進めている。3 年部の研究に少しでも役に立てないかと思い、選んだのが、「店ではたらく人」でスーパーマーケットに校外学習に行った後、自分たちで店のレジ前商品棚を考える授業に取り組んだ。なぜレジ前に商品棚があるのかということを押さえ、自分たちの商品棚を考えた。校外学習後、見つけて来たひみつや工夫を付箋に書いて店内図に貼った。単元の初めに各ご家庭で行っていただいた買い物調べを基に、店の工夫とお客さんの願いは「つながっている」ことが分かった。また店は自分たちの「もうけ・利益」についても考えなければならないことも押さえた。データとしては我々の居住区にあるスーパーマーケットのレジ前商品棚を虱潰しに撮影した。意外にもレジ前商品棚は、「買い忘れがないように」や「お買い得」といった店側の思いとは裏腹に、「お菓子だけ」「電池だけ」「洗剤だけ」「飲み物だけ」といったものが多かったのだが、これが子どもたちの意欲に火をつけたようで、子どもたちは真剣にレジ前商品棚を作成していった。ここで「さすが」と思った子どもたちの発想を紹介しておく。「買い過ぎたものを戻す棚」「絶対に割れないように卵をレジの横に置く棚」「フリーペーパー」等々である。このあとグループで１つの商品棚を作り、最後に学級の商品棚を作った。子どもたちに「誰のことを考えて作ったの？」と聞くと、もちろん「お客さん」という応えが返って来た。改めて、店はお客さんのことを考えて様々なくふうをしていることを実感できた。

⑺古い道具と昔のくらし

古い道具と昔のくらしの単元では、タイには郷土資料館のようなものがないので（博物館のようなものはあったのでそこで写真を手に入れた）洗濯板で体験学習と、あとは写真や映像で学習をすすめた。最後には私と一緒にノートまとめ大会をした。今の子たちは、ゲームやPC に触れる機会も多いことからアイデアいっぱいで、イラストも多彩であった。改めて子どもたちの意欲に感心した。

⑻火事からくらしを守る

2 学期は「工場ではたらく人」の単元があるのだが、3 学期に味の素工場の見学があることから単元を入れ替えて学習を進めた。今年は 4 年生から「くらしを守る」の消防と警察の単元が下りて来たので、消防の単元を 2 学期に学習することとなった。消防の単元と言ってもバンコク日本人学校では消防署への見学は実施していない。子どもたちはよく考え色々な意見を出してくれるのだが、やはり実体験がないと、どうしても盛り上がりに欠けてしまう感じがする。実際にはしご車や通信指令室を見て「すごいな～」という感覚を味わってもらいたいのだがそうは言っても始まらないので、今回は学校の消火栓を探し、その位置について注目してみることにした。簡単な構内図を配って、消火栓の位置を確認していった。消火栓の位置から分かることを考えていくと、「どの階にも消火栓がある」、「階の端までホースが届く」、「プールが近い」など、様々な意見が出てきた。実際に自分で動いてそこから考える方が色々な意見が出るなと感じた。しかし、教科書にあった資料から、「なぜ人口は増えているのに火事の件数は変わらない（減っている）のか？」について考えたときも、前単元の「古い道具とむかしのくらし」から、「昔と比べて火を使う道具が減った」、「くらしが便利になった（きけんが減った）」、「より気を付けるようになった」等単元をつなげて考えることもできた。また、同期の先生が住んでいるマンションで消火訓練が行われた時の様子や、学校で教員が行っている消火訓練の様子なども見せて少しでも消防活動に興味をもってもらうよう努めた。

(9) 工場の仕事

2 学期に実施する予定だった工場の仕事を 3 学期に回し、学習を進めている。とにかく片道 2 時間程度かかるので、バスの中から子どもたちを飽きさせないように工夫していかなければならない。12 学級全員を集めて味の素工場での校外学習に向けた事前学習を行った。まずはバスの中の 2 時間をどうするか、バスレクについて話をし、バスの中での過ごし方やマナーについて話した。工場に到着する前から学習は始まっていると伝え、工場の周りの様子についてもみんなで考えた。工場見学時には質問タイムもあることから、鋭い質問ができるように「なぜ～なのですか」とうい質問ができるといいねと伝えた。各学級の授業では、「なぜ～」の質問をした後に「では～はどうなのですか？」と追質問ができるように、工場の方の答えを予想した。質問が苦手な子も、学級の友達が聞いてくれることをメモし、しおりの「聞いてくること」の欄を埋めた。また、「見てくること」では、「工場の周りの様子」や「人と機械の関わりや仕事の違い」や「服の色の違いはそんなに分かりやすいのか」等たくさんの視点があがり、工場見学が楽しみになってきた。因みに、味の素が出しているクックドゥシリーズの麻婆豆腐の原産国は「タイ」となっている。日本で普通に売られている商品が作られている所に見学に行くということで、みんなワクワクがとまらないようであった。みんな当日が楽しみにしいた。やはり実際に見に行くことは 1 番学びに繋がると感じた。

(10) 味の素工場見学

2 月にはタイ味の素の工場見学に行ってきた。タイ味の素ノンケー工場は味の素の商品の中でも、調味料「ロッディー」、缶コーヒー「バーディ」、そして味の素のメイン商品であるクックドゥの製造を手掛けている。その中でも、子どもたちは一番身近なクックドゥの製造過程を見学した。子どもたちは約 2 時間、100ｋｍの道のりも、楽しくバスレクをしたり、味の素工場見学についてのクイズを出したりして過ごした。工場に到着するなり、味の素工場の大きさに驚きを隠せていない様子だった。事前学習では、26 万㎡、学校の約 7 倍という数字は認識していたのだが、やはり実際見てみるのでは全然違う。子どもたちはワクワクしながら工場内へ。PR ルームでは質問代表の児童が質問をしたが、その後の他の子どもたちへの質問タイムでは質問が止まることはなかった。子どもたちの興味はいっぱいで、しかも鋭い。しかし、その質問に工場の方々は丁寧に、全て分かりやすく答えてくれた。子どもたちの質問の中には、「どうしてタイと日本の CM で、『♫あじのもと』の言い方が違うのか」、「なぜクックドゥのマーボー豆腐、マーボー茄子以外のクックドゥの原産国はタイと書かれていないのか」等、自分たちで見たり聞いたりした鋭い質問をしていた。事前学習と日常の生活が結びついているようで、子どもたちの意識の高さに驚かされた。たくさんの知識を得、疑問を解決した子どもたちは、まとめとして 2 回目の新聞作成に取り組んだ。やはり 2 回目とあって新聞のレベルも上がっており、子どもたちの成長を感じた。

(11) 1 年間の社会科の授業を通して

年度当初、社会科の授業を「楽しみにしている」とほぼ 100％の子どもが答えていたが、3 学期の最後にも「社会科が好きか？」と答えた子どもはほぼ 100％であった。なんとか社会科嫌いの子どもを作らずに 1 年間取り組んでこられたが、これは何よりも子どもたちの普段からの意欲、モチベーションの高さが大きな要因ではないかと考える。担任の先生方の学級経営にも助けられたところも大きいと感じる。そのような、意識の高い子どもたちの思いに応えられるように教材研究に取り組んできたが、まさに 3 年部の先生方とのメンバーシップ、子どもたちとの信頼関係がうまくかみ合った結果ではないかと思う。充実した 1 年間を過ごせたことに感謝したい。

３．おわりに

日本とは違い海外の在外教育施設では、簡単に校外に出ることはできない。そんな中で日本と同等の教育をするためにどうすればよいかを学年全体で考えた。バンコク日本人学校小学 3 年部は 12 学級あり、学年に携わる先

生は20名を超える。全国から集まった先生方と意見を交わし合い、過ごせた3年間は私にとって人生最高の宝となった。また学年全員で、全力で子どもたちに向き合うことができたと感じている。この場を借りて学年の先生方、バンコク日本人学校に感謝申し上げたい。